

第 42 回名古屋春栄会  
演目のあらまし

平成 23 年 7 月 31 日

名古屋春栄会事務局

## 目 次

小袖曾我（こそでそが）	1
猩々（しょうじょう）	2
鶺ノ段（うのだん）〔鶺飼（うかい）〕	3
胡蝶（こちょう）	4
西王母（せいおうぼ）	5
放下僧（ほうかそう）	6
是界（ぜがい）	7
鉄輪（かなわ）	8
自然居士（じねんこじ）	10
養老（ようろう）	12
杜若（かきつばた）	13
笠ノ段（かさのだん）〔芦刈（あしかり）〕	14
源氏供養（げんじくよう）	15
融（とおる）	16
芭蕉（ばしょう）	17
車僧（くるまそう）	18
老松（おいまつ）	19
兼平（かねひら）	20
野守（のもり）	21
〔能のミ二知識	22〕

このリーフレットは、第42回名古屋春栄会の演目を解説したものです。  
演目の記載順は、番組の順です。  
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

## 小袖曾我（こそでそが）

---

【分類】四番目物（雑能） ＊男舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：曾我十郎祐成（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

曾我十郎と五郎の兄弟は、源頼朝が富士の裾野で巻狩を行うので、この機会に親の敵工藤祐経を討とうと決心します。そうして、それとなく暇乞いをするため、また、五郎の勘当の許しも得ておこうと、母のもとを訪れます。まず、十郎が案内を求めると、母は喜んで迎え入れますが、五郎には出家になれという母の命にそむいたというので怒って会おうとしません。十郎はこのたび兄弟そろって御狩に出ようとしたのに、弟を許してくださらないのは、私の身をも思ってくださいらないことになるのです。また、五郎は箱根にいた間母上のことを思い、亡き父の回向に心を尽くしていたのですと、いろいろと弟のためにとりなし、母に怨みを述べて、弟と共に立ち去ろうとします。すると兄弟の心が通じ、母もようやく五郎の勘当を許します。二人は喜びの酒を酌み交わし、共に立って舞い、これが親子最後の対面かと名残もつきませんが、狩場に遅れてはならぬと、母に別れのあいさつをして、勇んで出立します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

舞のかざしのその隙に。舞のかざしのその隙に。兄弟目をひき。これや限りの親子の契りと。思えば涙も尽きせぬ名残。牡鹿の狩場に遅参やあらんと。暇申して帰る山の。富士野の御狩の折を得て。年来の敵。本望を遂げんと。互に思う瞋恚の焰。胸の煙を富士おろしに。晴らして月を清見が関に。終にはその名をとめなば兄弟。親孝行の。ためしにならん。嬉しきよ。

## 猩々（しょうじょう）

---

【分類】五番目物（祝言物） \*中ノ舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：猩々（面・猩々）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

親孝行で評判の高い高風という男が、揚子の市で酒を売ると富貴の身になるという夢を見、そのお告げのとおり酒を売って金持ちになりました。その高風の店に来て酒を飲む者で、いくら飲んでも顔色が変わらない者がいるので、ある日、名を尋ねると海中に住む猩々だと明かして帰って行きました。そこで、高風はある月の美しい夜に潯陽の江のほとりに酒壺を置き、猩々の出てくるのを待つことにします。やがて、猩々は薬の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をみたい、よき友と会うことを楽しみに、波間から浮かび出て、高風と酒を酌み交わします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸边の芦の葉は風に吹かれて笛の音を奏で、波の音は鼓の調べのように響きます。この天然の音楽にのって、猩々は舞い出します。そして高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

よも尽きじ。よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽きず。飲めども変らぬ。秋の夜の盃。影も傾く入江に枯れ立つ。足元はよろよろと。酔いに伏したる枕の夢の。覚むると思えば泉はそのまま。尽きせぬ宿こそ。めでたけれ。

## 鵜ノ段（うのだん）〔鵜飼（うかい）〕

【分 類】五番目物（鬼物＝鬼神物） ＊カケリ

【作 者】榎並左衛門五郎原作、世阿弥改作

【主人公】前シテ：鵜使いの老人（面・三光尉）、後シテ：閻魔王（面・小癡見）

【あらすじ】（『鵜ノ段』の部分…下線部）

安房国（千葉県）の清澄の僧が、甲斐国（山梨県）への行脚を志し、途中、石和川のほとりに着きます。その土地の人に、一夜の宿を頼みますが、旅の者に宿を貸すことは禁制だと断られます。その代わりに、川辺の御堂を教えられ、そこに泊まることにします。するとそこに一人の老人が鵜を休めるために立ち寄ります。僧が、老人なのにいつまでも殺生するのはやめて、他の職業についたらと意見をすると、老人は、自分は若い時からこの仕事で生計を立ててきたので、今さらやめるわけにはいかないと答えます。従僧が、二、三年前にこの地を訪れた時、このような老人に会い、もてなしを受けたと話すと、老人はその鵜使いは禁漁を犯したため殺されたと語り、実は自分がその亡霊だと明かします。僧のすすめで亡者は罪業消滅のため鵜飼のさまを見せて消えてゆきます。

<中入>

僧たちはやって来た先刻の土地の者からも、密漁をして殺された男の話を聞き、先ほどの老人こそ鵜使いの化身であったと信じ、法華經の文句を川辺の石に一字ずつ書いて川に沈めて回向します。すると地獄の鬼が現れて、かの鵜使いは地獄へ墮ちるはずであったが、生前、僧を接待した功德と、法華經の効力によって救われ、極楽へ送ることになったと告げ、法華經のありがたさをたたえます。

【詞章】（『鵜ノ段』の部分の抜粋）

湿る松明振り立てて。藤の衣の玉襷。鵜籠を開き取り出し。島つ巢おろし荒鵜ども。  
この川波に。ぱっと。放せば。おもしろの有様や。おもしろの有様や。底にも見ゆる篝火に。驚く魚を追い回し。潜きあげ掬いあげ。隙なく魚を食う時は。罪も報いも後の世も。忘れ果てて面白や。みなぎる水の淀ならば。生け簀の鯉やのぼらん。玉島川にあらねども。小鮎さ走るせぜらぎに。かだみて魚はよもためじ。不思議やな篝火の。燃えても影の暗くなるは。思い出でたり。月になりぬる悲しさよ。鵜舟のかがり影消えて。闇路に迷うこの身の。名残をしさを如何にせん。名残をしさを。如何にせん。

## 胡蝶（こちょう）

---

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊中ノ舞

【作 者】観世小次郎信光

【主人公】前シテ：都の女（面・小面または増女）、後シテ：胡蝶の精（面・同じ）

【あらすじ】（今回の舞囃子の部分…下線部）

吉野の奥に住む僧が、花の都を見物しようと上京し、一条大宮のあたりにやって来ます。そこに由緒ありげな古宮があり、その御殿の階段の下に梅が今を盛りと美しく咲いています。僧が立ち寄って眺めていると、そこへ人気のなさそうな家の中から、一人の女性が現れ声をかけて来ます。そして、この御殿や梅の木について語ってくれます。僧は喜んで、女の素性を問いただすと、実は自分は人間ではなく胡蝶の精だと明かします。そして、春、夏、秋と草木の花かがりし、法華経の功德を受けたいのですね、と、荘子が夢で胡蝶になったという故事や、光源氏が童に胡蝶の舞をまわせ御船遊びをなさったことなどを語り、もう一度、御僧の夢の中でお会いしましょうと夕空に消えてゆきます。

<中入>

僧は所の人からも、この古宮や胡蝶の話聞き、花の下陰に仮寝をしていると、その夢に胡蝶の精が現れて、法華妙典の功力によって、梅花とも縁を得たことを喜び、花に飛びかう胡蝶の舞をみせ、やがて春の夜の明けゆく空に、霞にまぎれて去ってゆきます。

【詞章】（今回の舞囃子の部分の抜粋）

人とはいかで夕暮れに。交わす言葉の花の色。隔てぬ梅に、飛びかけりて。胡蝶にも。誘われなまし。心ありて、八重山吹も隔てぬ梅の。花にとび交う胡蝶の舞の。袂も匂う、けしきかな。

<中ノ舞>

四季おりおりの花ざかり。四季おりおりの花盛り。梢に心をかけまくも。かしこき宮の所から。しめの内野もほど近く。野花黄鳥春風を領し。花前に蝶舞うふんぷんたる。雪をめぐらす舞の袖。返すがえすも。おもしろや。春夏秋の。花もつきて。春夏秋の。花もつきて。霜をおびたる白菊の。花折りのこす枝をめぐり。めぐりめぐるや小車の。法にひかれて仏果に至る。胡蝶も歌舞の菩薩の舞の。姿を残すや春の夜の。あけゆく雲に羽根うちかわし。あけゆく雲に。羽根うちかわして。霞にまぎれて。うせにけり。

## 西王母（せいおうぼ）

---

【分 類】初番目物（脇能＝女神物） \*中ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】前シテ・後シテ：西王母（面・増女）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

周（中国）の穆王の時代に、帝主催の宴が開かれます。その宴の最中、ある女が桃の枝を持って帝のもとへ現れます。帝は西王母の桃であろうと喜びますが、女は、自分が西王母の化身であり、この世を言祝ぐため、桃の実を持って再び訪れることを予言して消え去ります。

<中入>

人々が様々な管弦を奏して西王母の到来を待ち受けていると、西王母は桃の実を携えた侍女とともに現れます。その桃の実を皇帝に捧げた後、西王母は優雅に舞いながら明け方の雲に紛れて天上へと帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

花も酔えるや盃の。花も酔えるや盃の。手まずさえぎる曲水の宴かや御川の水に。  
戯れ戯るるたおやめの。袖も裳裾もたなびきたなびく。雲の花鳥。春風に和しつつ。  
雲路にうつれば。王母も伴ひよじのぼり。王母も伴ひ上るや天路の。行方も知らずぞ。なりにける。

## 放下僧（ほうかそう）

---

【分 類】四番目物（現在物） \*羯鼓〔かっこ〕

【作 者】不詳

【主人公】前シテ：禅僧・小次郎の兄（直面）、後シテ：小次郎の兄（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

下野国（栃木県）の住人、牧野左衛門は、相模国（神奈川県）の利根信俊と口論の末、打ち果たされてしまいます。その子の牧野小次郎は、父の無念を思い、信俊を敵とつけ狙いますが、相手は大勢、こちらは唯一人で思うにまかせません。そこで、幼少から出家している兄に力を求めるべく、禅学修行中の学寮へ訪ねて行きます。そして一緒に仇討に出立しようと促しますが、兄は出家の身を思い、ためらいます。小次郎は、親の敵を打たぬのは不孝であるといい、母を殺した虎をねらって、百日、野に出、虎と見誤って大石を射たが、一心が通じて矢は突き立ち、血が流れた、という中国の故事を物語ります。兄も弟の熱意に動かされ、仇討に同意します。そして二人は談合の末、敵に近寄る方便として、当時流行の放下僧と放下に変装して、故郷に名残りを惜しみつつ出発します。

<中入>

一方、利根信俊は夢見が悪いため、瀬戸の三島神社への参詣を志します。道中、放下が来るというので、従者が旅の徒然にと呼び寄せます。小次郎兄弟は、浮雲・流水と名乗り、信俊に近づきます。そして、兄は自分の持つ団扇のいわれを、弟も携えた弓矢のことを面白く説きます。つづいて禅問答に興じ、曲舞や羯鼓、小歌などさまざまな芸を見せていきます。そして、相手の油断を見すまし、兄弟ともども斬りかかって、首尾よく本望をとげます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

面白の。花の都や筆に書くとも及ばじ。東には。祇園清水落ちくる滝の。音羽の嵐に地主の桜はちりぢり。西は法輪。嵯峨の御寺廻らば廻れ。水車の輪のいせき威堰の川波。川柳は。水に揉まるるふくら雀は。竹に揉まるる野辺のすすきは。風に揉まるる都の牛は。車に揉まるる茶臼は挽木に揉まるる。げにまこと。忘れたりよこきりこは放下に揉まるるこきりこの二つの竹の。代々を重ねて。うち治めたる御代かな。

## 是界（ぜがい）

---

【分 類】五番目物（切能一天狗能） \*イロエノ舞働

【作 者】竹田法印宗盛

【主人公】前シテ：是界坊（直面）、後シテ：是界坊（面・大癒見）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

中国の天狗の首領である是界坊は、中国において高慢の僧を残らず天狗道に誘い入れたので、次は、日本の仏法を妨げようと日本にやって来ます。そして、日本に渡ってくると、まず愛宕山の天狗の太郎坊を訪ね、相談し、比叡山を襲うことにします。語り合ううちに不動明王の威力が恐ろしく弱気になりますが、やがて決心して太郎坊の案内で比叡山に向います。

<中入>

比叡山の僧が勅命を受け、参内しようとして下山すると、にわかには嵐が起り天地が震動して、是界坊が天狗本来の姿で現れます。そして、僧を魔道に誘い入れようとするので、僧は悪魔降伏のため不動明王を念ずると、不動明王は矜羯羅童子と制多迦童子を従えて、十二天とともに現れます。また、日吉、石清水、松尾、北野、賀茂の神社の神々も現れて、是界坊に襲いかかります。是界坊も負けじと奮闘しますが、仏力・神力に翻弄され、さすがの是界坊も力を失って、もう決して日本には来ないと言って、中国に退散します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

明王諸天は、さておきぬ。明王諸天は、さておきぬ。東風ふく風に。東をみれば。山王権現。南に男山西に松の尾北野や加茂の。神風松風ふきはらえば。さしもに飛行のつばさも地に落ち。力もつき弓のやしまの浪の。たちさると見えしが又とび来たり。さるにても。かほどに妙なる佛力神力。今よりのちは。来たるまじと。いう声ばかりは虚空にのこり。いう声ばかりは虚空にのこって。姿は雲にぞ。入りにける。

## 鉄輪（かなわ）

【分類】四・五番目物（怨霊物）

【作者】不詳

【主人公】前シテ：都の女（面・泥眼）、後シテ：鬼女（面・生成）

【あらすじ】（連吟の部分…下線部）

都に住む一人の女が、自分を捨てて新しく妻を迎えた夫の不実を恨んで、洛北・貴船の社に日参し、祈願をかけています。今日も社前に進むと、待ち構えていた社人が、「頭に鉄輪をいただき、その三本の足に火を灯し、顔に丹を塗り、赤い着物を着て、怒る心を持てば、たちまち鬼になって願いがかなう」という神託のあったことを告げます。女は人違いだと言いますが、そう言う間にも顔色が変わり、つれない人に思い知らそうと走り去ります。

<中入>

一方、下京の男は、悪い夢見が続くので、陰陽師の清明のもとを訪れ、事情を述べて占ってもらおうと、女の恨みで今夜にも命が尽きると言われ、急いで祈禱を頼みます。清明は、祭壇を調べ、男と新しい妻の人形を作って置き、祈り始めます。すると、悪鬼となった女の霊が現れ、夫の心変わりを責め、後妻の髪をつかんで激しく打ちすえますが、守護する神々に追っ立てられ、神通力を失って、心を残しながらも退散します。

【詞章】（連吟の部分の抜粋）

それ花は斜脚の暖風に開けて。同じく暮春の風に散り。月は東山より出でて早く西嶺に隠れぬ。世上の無常はかくの如し。因果は車輪のめぐるがごとし。我に憂かりし人人に。たちまち報いを。見すべきなり。恋の身の浮かむ事なき賀茂川に。沈みしは水の。青き鬼。われは貴船の。川瀬の萤火。頭に頂く鉄輪の足の。焰の赤き。鬼となって。臥したる男の枕に寄りそい。いかにつま人よ。珍しや。怨めしや。おん身と契りしその時は。玉椿の八千代。二葉の松の末かけて。変らじとこそ思いしに。などしも捨ては。はてたもうらん。あら怨めしや。捨てられて。捨てられて。思う思いの涙にむせび。人を怨み。夫をかこち。ある時は恋しく。または怨めしく。起きても寝ても忘れぬ思いの。因果は今ぞと。白雪の消えなん命は今宵ぞ。痛わしや。悪しかれと思わぬ山の。峰にだに。思わぬ山の峰にだに。人の嘆きは生うなるに。いわんや年月。思いに沈む怨みの数。つもって執心の。鬼となるもことわりや。いでいで命を取らん。いでいで命を取らんと。しもつを振り上げうわなりの。髪を手から巻いて。打つや宇都の山の。夢うつつとも分かざる浮き世に。因果はめぐりあいたり。今さらさこそ。悔しかるらめ。さて懲りよ思い知れ。ことさら怨めしき。ことさら怨めしき。あだし男を取って行かんと。臥したる枕に立ち寄り見れば。恐ろしやみてぐらに。三十番神ましまして。魍魎鬼神はけがらわしや。出でよ出でよと責めたもうぞや。腹立ちや思う夫をば。取らであまさえ神々の。責めを蒙る悪

鬼の神通通力自在の勢い絶えて。力もたよたよと。足弱車のめぐり逢うべき。時節を待つべしや。まずこの度は帰るべしと。いう声ばかりはさだかに聞こえ。いう声ばかり。聞こえて姿は。目に見えぬ鬼とぞ。なりにける。

## 自然居士（じねんこじ）

【分類】四・五番目物（芸尽物・喝食物） ＊中ノ舞／羯鼓

【作者】観阿弥

【主人公】シテ：自然居士（面・大喝食）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

東山雲居寺（京都市）門前の男が、自然居士が雲居寺造営のため七日間の説法を行っていることを述べ、今日が結願の日であると告げます。やがて自然居士が登場し、説法を始めると、一人の少女が、小袖を供え、両親追善のために読経を願う文を持って来ます。居士はその文を開き読み上げます。そこへ二人の人商人が現れ、昨日買い取った少女がまだ戻らないので探していると言い、少女を見つけると引き立てて行きます。少女は、自分の身を売って求め得た小袖を、布施に供えたことがわかり、居士も集まった人々もその哀れさに同情の涙をもよおします。居士は仏法修行をここで捨てても、少女を救おうと結願目前の説法を中止し、小袖を抱えて人商人たちの後を追います。そして、大津の浜でちょうど船出しようとしている人商人たちに追いつきます。居士は、小袖を投げ返し、着物の裾を波に濡らして舟にすがりついて引き止め、少女を戻してくれるように頼みます。しかし、人商人は、一度買ったらもう戻さぬのが決まりとうそびきます。居士は、不幸せな者を救うことができないなら、雲居寺には戻らぬ、この少女とともに陸奥国まで行こう、たとえ命を取られても舟からは降りぬと答えます。居士の気迫に押され気味の人商人は、居士なぶりに転じ、どうしても少女を返して欲しいなら、今ここであれこれ芸をやってみせろと迫ります。居士はよかろうと言って、芸尽くしを始めます。中之舞から曲舞を舞い、ササラをすり、羯鼓を打って、舞に舞います。こうして、やっとな商人から少女を取り戻し、ともに都へ帰ります。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋、今回は、《 》の部分は省略しています。）

しかれば船のせんの字を。公にすすむと書きたり。さてまた天子のおん舸を。竜舸と名づけ奉り。舟を一葉という事。この御宇より生まれり。また君のご座舟を。竜頭鷁首と申すも。このみ代より起れり。《われらが舟を竜頭鷁首と祝われ祝着申して候。とてもものにささらをすっておん見せ候え。さらばささらをたまわり候え。船中の事にて候ほどにささらは持たず候。さらばこの序にささらの起こりを語って聞かせ申そう。かの仏の難行苦行したまいしも。一切衆生を助けんためなり。居士もまたこの者ゆえに身を捨て骨を砕くべし。》それささらの起こりを尋ぬるに。東山にある僧の。扇の上に木の葉の散りしを。数珠にて払いし音よりも。ささらという事始まりたり。そのごとくささらの子には百八の数珠。ささらの竹には扇の骨。おっとり返しこれをする。所は志賀の。浦なれば。さざ波やさざ波や。志賀唐崎の。松の上葉をさらりさらりとささらの真似を。数珠にてすれば。ささらよりなお。手をもするもの。今は助けて。たびたまえ。《とてもものに羯鼓を打っておん見せ候

え。この上はともかくもなぶられ参らせ候べし。≫もとより鼓は。波の音。

<羯鼓>

もとより鼓は波の音。寄せては岸を。どうどは打ち。雨雲まよう鳴神の。とどろとどろと鳴る時は。降り来る雨ははらはらはらと。小篠の竹の。ささらをすり。狂言ながらも法の道。今は菩提の岸に寄せくる。舟の内より。ていとうど打ち連れて。ともに都に。のぼりけり。ともに都にのぼりけり。

## 養老（ようろう）

---

【分類】初番目物（協能） ＊神舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁、後シテ：山神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

初夏に美濃国（岐阜県）本巢郡に霊水が湧き出るといふ報告があったので、雄略天皇の勅命を受けて勅使が下向します。一行が養老の滝のほとりに着くと、老人と若者の二人のきこりがやって来ます。勅使はこれこそ話に聞く養老の親子であろうと思って尋ねると、果たしてそうでした。老人は問われるままに養老の滝と名づけられたいわれを物語ります。次いで老人は勅使を滝壺に案内し、霊泉をほめ、他の霊水の例を挙げつつ、この薬の水の徳をたたえます。すべてを見聞した勅使が感涙を流し、この由を奏聞しようと都に帰ろうとすると、天から光がさし、花が降り、音楽が聞こえ、ただならぬ様子となります。

<中入>

そこへ土地の者が来て養老の滝のいわれを語り、滝の水を飲んで若返りの様を見せます。続いて養老の山神が出現し、清らかな水をたたえ、神仏はもとより同体であり、共に衆生を救おうとの御誓願であって、時として神として現れ、仏として現れるのであると述べます。そして、峰の嵐や谷川の音を音楽として舞を舞い、太平の世を祝して神の国に帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

松陰に。千代をうけたる。みどりかな。さもいさぎよき山の井の水。山の井の水。山の井の。水とうとうとして。波悠々たり。治まる御代の。君は船。君は船。臣は水。水よく船を。浮め浮めて。臣よく君をあおぐ御代ぞといく久しきも。尽きせじや尽きせじ。君に引かるる玉水の。上澄む時は。下も濁らぬ滝津の水の。浮き立つ波の。返すがえすも。よき御代なれや。よき御代なれや。万歳の道に帰りなん。万歳の道に帰りなん。

## 杜若（かきつばた）

---

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊イロエ／序ノ舞

【作 者】金春禅竹

【主人公】シテ：里の女＝杜若の精の化身（面・小面）

【あらすじ】（今回の仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

旅僧が都から東国へと赴き、三河国（愛知県）にやって来ます。そこは杜若の花が今を盛りと咲き誇っているのです。僧が花に見とれていると、一人の里の女がやって来ます。そして、ここは八橋という古歌にも詠まれた杜若の名所だと教え、在原業平が「かきつばた」の五文字を各句の頭において、「唐衣 着つつ馴れにし 妻しあれば はるばる来ぬる 旅をしぞ思ふ」と詠んだ事を語り、杜若は業平の形見の花だと思ひます。その上、僧を自分の庵に案内します。やがて、初冠と唐衣を着て現れるので、僧が驚いて尋ねると自分は杜若の精であると明かします。そして、伊勢物語に描かれた業平の数々の物語や、業平が歌舞菩薩の生まれ変わりである事などを語り、舞をまい、草木も成仏できることを喜びつつ消えて行きます。

【詞章】（今回の仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

植えおきし。昔の宿の。かきつばた。色ばかりこそ昔なりけれ。色ばかりこそ昔なりけれ。色ばかりこそ。昔男の名をとめし。花橋の。匂いうつる。あやめの鬘の。色はいづれぞ。似たりや似たり。かきつばた花あやめ。梢に鳴くは。蟬の唐衣の。袖白妙の卵の花の雪の。夜もしらしらと。明くるしののめの。あき紫の。杜若の。花も悟りの。心ひらけて。すわや今こそ草木国土。すはや今こそ。草木国土。悉皆成仏のみ法を得てこそ。帰りけれ。

## 笠ノ段（かさのだん）〔芦刈（あしかり）〕

【分類】四番目物（男物狂物） \*男舞

【作者】世阿弥（古能を改作）

【主人公】シテ：日下左衛門（直面）

【あらすじ】（今回の仕舞[笠ノ段]の部分…下線部）

津の国の日下の里（大阪府東大阪市）の住人の左衛門は貧乏のすえ、心ならずも妻を離縁します。妻は、京の都に上って、さる高貴な人の若君の乳母となり、生活も安定したので、従者を伴って難波の浦へ下り、夫の行方を尋ねます。在所の者に聞いても、以前のところにはいないということで、途方にくれますが、しばらくの間、付近に逗留して夫を捜すことにします。一方、左衛門は落ちぶれて、芦を刈りそれを売り歩く男になっています。しかし、彼はその身の不遇を嘆くでも怨むでもなく、すべてを運命と割り切って、時に興じ物に戯れ、自分の生業に満足しています。そして、ある日妻の一行とも知らず、面白く囃しながら芦を売り、問われるままに、昔、仁徳天皇の皇居があった御津の浜の由来を語り、笠尽しの舞をまっせ見せます。いよいよ買ってもらった芦を渡す段になって、思いがけず妻の姿を見つけ、さすがに今の身の上を恥じて、近くの小屋に身を隠します。後を追おうとする従者をとどめ、妻は自分で夫に近づき、やさしく呼びかけます。夫婦は和歌を詠み交わして、心もうちとけ、再びめでたく結ばれます。装束も改めた左衛門は従者のすすめで、さわやかに祝儀の舞をまい、夫婦うち揃って京の都へ帰ってゆきます。

【詞章】（今回の仕舞[笠ノ段]の部分の抜粋）

あれ御覽ぜよ御津の浜に。網子ととのうる網船の。えいやえいやと寄せ来たるぞや。名にし負う難波津の。名にし負う難波津の。歌にも大宮の。内まで聞こゆ網引きすと。網子ととのうる。海士の呼び声と詠みおける。古歌をも引く網の。目の前に見えたる有様。あれ御覽ぜよや人人。おもしろや心あらん。おもしろや心あらん。人に見せばや津の国の。難波わたりの春の景色。おぼろ舟こがれ来る。沖のかもめ磯千鳥。連れだちて友呼ぶや。海士の小舟なるらん。雨に着る。田叢の島もあるなれば。露も真管の。笠はなどか無からん。難波津の春なれや。名に負う梅の花笠。縫うちょう鳥の翼には。鶺鴒も有明の。月の笠に袖さすは。天つ乙女の衣笠。それは乙女。これはまた。なにわ女の。難波女の。かずく袖笠肘笠の。雨の芦辺の。みだるるかたおなみ。あなたへざらり。こなたへざらり。ざらりざらり。ざらざらざと。風の上げたる。古簾。つれづれもなき心。おもしろや。

## 源氏供養（げんじくよう）

---

【分 類】三番目物（本鬘物） \*イロエ

【作 者】金春禅竹（?）

【主人公】前シテ：里の女（面・小面）、後シテ：紫式部の霊（面・同じ）

【あらすじ】（独吟の部分…下線部）

安居院の法印が、石山寺の観世音に参詣する途中で、ひとりの里の女に呼び止められます。そして、自分は石山寺にこもって「源氏物語」を書き上げ、物語は後世まで残るものになったが、主人公の光源氏を供養しなかったので、作者の私は未だ成仏できないので、源氏の君の供養と私の菩提を弔ってくださいといます。法印が驚きながらも願い事を引き受けると、女は夕暮れの中をかき消すように消えてしまいます。

<中入>

法印は門前の男から紫式部の話を聞き、石山寺にしばらく逗留して弔うことにします。夜も更け、紫式部の身を思ひ「源氏物語」について思いをめぐらしていると、紫式部の亡霊が現れて、願文を法印に渡し、共に光源氏の回向をします。そして供養の礼にと舞をまい、これで自分も成仏できると告げます。法印は、紫式部は石山観世音がこの世に現れたもので、「源氏物語」もこの世が夢であることを人々に教える方便であったと知ります。

【詞章】（独吟の部分の抜粋）

そもそも桐壺の。夕べの煙すみやかに。法性の空にいたり。幕木の夜のこの葉は。ついに覺樹の。花散りぬ。空蟬のむなしきこの世をいとは。夕顔の露の命を觀じ。若紫の雲の迎え末つむ花の台に座せば。紅葉の賀の秋の。落葉もよしやただ。たまたま。仏意にあいながら。さかき葉のさして往生を願うべし。花散る里に住むとても。愛別離苦の理り。まぬかれがたき道とかや。ただすべからくは生死流浪の。須磨の浦をいでて。四智円明の。明石の浦にみをつくし。いつまでもありなん。ただ蓬生の宿ながら。菩提の道を願うべし。松風の吹くとても。業障のうす雲は。晴るる事さらになし。秋の風消えずして。紫磨忍辱の藤袴。上品蓮台に。心をかけて誠ある。七宝莊嚴の。真木柱のもとにゆかん。梅が枝の。匂いにうつるわが心。藤の裏葉におく露の。その玉鬘かけしばし。朝顔の光たのまれず。朝には梅檀の。かげにやどり木名も高き。つかさくらいをあずま屋の内にこめて。楽しみ栄えを。浮舟にたとうべしとかや。これも蜻蛉の身なるべし。夢のうき橋をうち渡り。身の来迎を願うべし。南無や西方弥陀如来。狂言綺語をふりすてて。紫式部が後の世を。助け給えともろともに。鐘うちならして。回向もすでに。終りぬ。

## 融（とおる）

---

【分 類】五番目物（切能＝貴人物） \*早舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：汐汲みの老人（面：三光尉）、後シテ：源融の霊（面：中将）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

東国から京へ上った諸国一見の旅僧が六条河原の院を訪れ有り、休んでいると、そこへ田子を担った老人がやって来ます。僧は、ここは海辺でもないのに汐汲み姿をしているのはどうしてかと尋ねます。すると老人は、ここは塩釜の浦を写した海辺だと答え、その昔に左大臣源融が塩釜の浦を模して造園し、毎日難波の浦から海水を運ばせて、塩を焼かせるという風流を楽しんだが、今はすっかり荒れ果てていると語ります。そして京の山々の名所を指し示しながら教えると、そろそろ汐を汲む頃合いだと見て消え失せます。

<中入>

僧は来合わせたこの辺りの者に、老人は源融の霊だろうと教えられ、弔うよう勧められます。僧は、その夜は夢の出会いを期待しながら旅寝をします。すると貴人姿の融大臣が現れ、名月の下で舞をまい、夜明けと共に消えて行きます。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）〔今回は、小書「笏之舞」なので、早舞が急ノ舞となります〕  
忘れて年を経しものを。まった古に帰る波の。満つ塩竈の名にしおう。今宵の月を陸奥の。千賀の浦わの遠き世に。その名を残す大臣。融の大臣とは。わが事なり。われ塩竈に心をうつし。あの籬が島の松蔭に。名月に舟を浮かめ。月宮殿の白衣の袖も。三五夜中の新月の色。千重ふるや。雪をめぐらす雲の袖。さすや桂の枝枝に。光を花と。散らす粧い。ここにも名に立つ白河の波の。あら面白や曲水の杯。うけたりうけたり。遊舞のそで。

<急ノ舞>

あら面白の遊楽や。あら面白の遊楽や。そも名月のその中に。まだ初月の宵々に。影も姿も少なきはいかなる謂なるらん。それは西岫に。入り日のいまだ近ければ。その影に隠さるる。たとえば月のある夜は。星の薄きがごとくなり。青陽の春の始めには。霞む夕べの遠山。黛の色に三日月の。影を舟にもたとえたり。また水中の遊魚は。釣針と疑い。雲上の飛鳥は。弓の影とも驚く。一輪もくならず。万水ものぼらず。鳥は池辺の木に宿し。魚は月下の波に伏す。聞くとも飽かじ秋の夜の。鳥も鳴き。鐘も聞こえて。月もはや。影かたむきて明け方の。雲となり雨となる。この光陰に誘われて。月の都に。入りたもう粧い。あら名残惜しの面影や。名残惜しの。面影。

## 芭蕉（ばしょう）

---

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【主人公】前シテ：女（面・曲見または小面）、後シテ：芭蕉の精（面・同じ）

【作 者】金春禅竹

【あらすじ】（今回の仕舞[キリ]の部分…下線部）

楚国（中国）の小水という所の山中に住んで修行する僧が、夜読経する時に庵室のあたりで人の気配がするので、今夜は名を尋ねようと思い、読経を始めると、女が月下に現れ、仏法結縁のために庵をお借りしたいと言います。女は女人成仏、草木成仏の功德を語り、僧は薬草喻品を読誦します。女は自分が芭蕉の精であることをほのめかして去っていきます。

<中入>

僧は土地の者から、鹿を射て芭蕉で覆い隠したが、その場所を忘れてしまい夢と違って諦めたという芭蕉の故事を聞きます。僧が先ほどの女の話をする、土地の者は法華経の読誦を勧めます。僧が月の光の下、読経をしていると芭蕉の精が現れて、女体に化身していることを不審に思い尋ねる僧に芭蕉の精が女体である謂れを話します。芭蕉の精は非情草木の成仏を説き、諸法実相を詠嘆して舞を舞います。そして、風の前の芭蕉の姿を見せたと思うと、夢のように消えてしまいました。

【詞章】（今回の仕舞[キリ]の部分の抜粋）

霜の経。露の緯こそ。弱からし。草の袂は。久方の。久方の。天つ乙女の羽衣なれや。これも芭蕉の葉袖をかえし。かえす袂も芭蕉の扇の風ぼうぼうともものすごき古寺の。庭の浅茅生女郎花刈萱。面影うつろ露の間に。山おろし松の風。吹き払い吹き払い。花も千草も。ちりぢりに。花も千草も。ちりぢりになれば。芭蕉は破れて残りけり。

## 車僧（くるまぞう）

---

【分 類】五番目物（切能）

【作 者】不明

【主人公】前シテ：山伏（直面）、後シテ：天狗太郎坊（面・大癒見）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

いつも牛のいない破れ車に乗って往来しているので「車僧」と呼ばれている奇僧がいました。ある雪の日、車僧はいつものとおり車に乗り、嵯峨野から西山の麓へやって来て、四方の雪景色を眺めて楽しんでます。するとそこへ、愛宕山の天狗が、山伏姿で現れ、この僧の奇行につけ込んで魔道に誘惑しようと、禅問答をしかけますが、軽くあしらわれてしまいます。そこで、自分は太郎坊だと名乗り、再度の挑戦を約して、雲に乗って飛び去ります。

<中入>

その後、溝越天狗と仇名される木葉天狗が出て来て、なんとか車僧を笑わせようと、さまざまなことをしますが、どうにもならず、これも逃げ去ってゆきます。やがて先の太郎坊が、今度は大天狗の姿で現れ、行くらべをいどみます。ところが、車僧の乗った牛もつけていない車は、太郎坊がいくら打っても動かなかつたのに、車僧が払子を一振りするだけで、自在に雪の山路を疾駆します。太郎坊はその法力に驚き、どうおどかしても自若としている態度に恐れ入り、仏法を妨げるのをあきらめ、ついには敬意を表して合掌して消え失せます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

不思議やなこの車の。不思議やなこの車の。ゆるぎ巡りて今までは。足弱車と見えつるが。牛も無く人も引かぬに。易す易すと遣りかけて飛ぶ。車とぞなりたりける。小車の山の陰野の道すがら。法の道の辺遊行して。貴賤の利益なすとかや。所から。ここは浮世の嵯峨なれや。雪の古道跡深き。車のわだちは足引の。大雪にはよも行かじ。げに雪山の道なりと。法の車路平かに。行くか行かぬかこの原の。草の小車雨添えて。打てども行かず。止むれば進むこの車の。法の力とて。嵯峨小倉大井嵐の。山河を飛び翔って。けばくすれども騒がばこそ。まことに奇特の車僧かな。あらたつとや恐ろしやと。がしょうをやわらげ大天狗は。合掌してこそ。失せにけれ。

## 老松（おいまつ）

【分類】初番目物（協能＝老神物） \*真ノ序ノ舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老人（面・小尉）、後シテ：老松の神（面・石王尉）

【あらすじ】（独吟〔クセ〕の部分…下線部）

都の西の方に住む梅津の某は、北野天満宮の夢のお告げを蒙り、筑紫国（福岡県）の安楽寺へ参詣することにします。はるばると旅をして、菅原道真の菩提寺である安楽寺へ着くと、老人と若い男がやって来て、梅と桜のことを述べ、花盛りの梅に垣を作ります。梅津の某は、彼等に言葉をかけ、有名な飛梅はどれかと問うと、神木であるから紅梅殿と崇めなさいとたしなめられ、同じく神木である老松についても教えられます。さらに梅津の某の頼みで、社殿の周辺の景色を述べ、松や梅が天神の末社として栄えていることを示し、中国では、梅は文学を好むので「好文木」といわれ、松は秦の始皇帝の雨やどりを助けたので「大夫」の位を授けられた故事などを教えたあと、神隠れします。

<中入>

おどろいた梅津の某は、供の者に土地の人を呼びにやらせ、その人から詳しく道真の事蹟や道真を慕って飛んできた梅、後を追ってきた松の話を聞きます。里人の勧めで梅津の某の一行は、松陰で旅寝をして神のお告げを待ちます。すると、老松の神霊が、紅梅殿に呼びかけながら登場し、のどかな春を祝って舞をまい、君の長寿を祝い、御代の永遠をことほぎます。

【詞章】（独吟〔クセ〕の部分の抜粋）

げにや心なき。草木なりと申せども。かかる浮世の理をば。知るべし知るべし。諸木の中に松梅は。ことに天神の。ご自愛にて。紅梅殿も老松もみな末社と現じ。たまえり。さればこの二つの木は。わが朝よりもなお。漢家に徳を現わし。唐の帝のおん時は。国に文学さかんなれば。花の色を増し。匂い常より勝りたり。文学すたれば匂いもなく。その色も深からず。さてこそ文を好む。木なりけりとて梅をば。好文木とは付けられたれ。さて松を。太夫という事は。秦の始皇の御狩の時。天俄にかき曇り。大雨しきりに降りしかば。帝雨を。しのがんと。小松の陰に寄りたもう。この松にわかには大木となり。枝を垂れ葉を並べ。木の間透間をふさぎて。その雨を漏らさざりしかば。帝太夫という。爵を贈りたまひしより松を太夫と申すなり。かように名高き松梅の。花も千代までと。行く末久しみ垣守。守るべし守るべしや。神はここも同じ名の。天満つ空も紅の。花も松ももろともに。神さびて失せにけり跡。神さびて。失せにけり。

## 兼平（かねひら）

---

【分 類】二番目物（修羅物）

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：船頭の翁（面・三光尉）、後シテ：兼平の霊（面・平太）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

粟津で討死した木曾義仲を弔おうと思い立ち、木曾の僧が春の近江路を粟津へと向かっていました。やがて矢橋の浦につくと、一人の老人が柴舟で行き過ぎようとするので、僧は老人に舟に乗せてくれるよう頼みます。老人はいったんは断わりますが、僧が重ねて頼むと、仏の教えは川を渡るのに渡し船を得るようなものという例えを思い出し、僧を柴舟に乗せます。粟津に向かう船上で、老人はあたりの名所を教えます。延暦寺の来歴などの話しを聞くうちに、舟は粟津の浦につきます。

<中入>

日も暮れ、僧は露深い粟津の草原で義仲の霊を弔いつつ野宿します。突然、鬨の聲が響き渡り、甲冑に身を包んだ武将が出現します。僧が誰かと尋ねると、亡き主を弔いにはるばる来たというので兼平が迎えたのだと答えます。今井四郎兼平といえは義仲の配下で、義仲と共に粟津で果てた武将です。これは夢かと訝しがる僧に、武将は昨日の老人も自分であったと明かし、昨日の舟を極楽への渡し舟として自分を彼岸へと送ってほしいと頼みます。兼平は義仲と自分の最後の戦いの様子を語り、一時は都を押さえた義仲でしたが、頼朝の軍にせめられてついにはたった七騎となって逃れますが、ついに義仲、兼平の二騎となってしまいます。人手にかかるのは末代まで恥辱との兼平の言葉に、ついに義仲も粟津の彼方の松原をめざしますが、薄氷のはった深田に、騎馬が足を取られて動けなくなってしまいます。今はこれまでと自害しようとして、最後に兼平の方を振り返ったその時に、矢が兜に突き刺さり義仲は落命しました。義仲が打ち取られたという声を聞いて、兼平は名乗りをあげて討ち手の大軍の中にわけいり、最後の戦働きをしたのち、刀をくわえて馬から飛び降りて自害して果てたのでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

兼平はかくぞとも。知らで戦うそのひまにも。御最期の御事を。心にかくる。ばかりなり。さてその後に思わずも。敵の方に声立てて。木曾殿討たれ給いぬと。呼ばれる声を聞きしより。今は何をか期すべきと。思い定めて兼平は。これぞ最期の高言と。あぶみふんばり大音上げ。木曾殿の御内に今井の四郎。兼平と名乗りかけて。大勢に割って入れば。もとより一騎当千の秘術を現し大勢を。粟津の。汀に追っつめて磯打つ波の。まくり切り。蜘蛛十文字に。打ち破りかけ通って。その後自害の手本よとて。太刀をくわえつつ逆さまに落ちて。貫かれ失せにけり。兼平が最期の仕儀。目を驚かす有様かな。目を驚かす有様。

## 野守（のもり）

---

【分 類】五番目物（切能＝鬼神物） ＊舞働

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：野守（面・三光尉）、後シテ：鬼神（面・小癩見）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

出羽国（山形県）の羽黒山からやって来た山伏が、大峰葛城山へと参る途中、大和国（奈良県）春日の里に着きます。そして、誰かに、このあたりの名所について聞きたいものだと思っていると、ちょうど一人の老人がやって来ます。そこで、近くにあったいわれのありそうな池について尋ねます。すると老人は、私のような野守が姿を写すので、この池は「野守の鏡」と呼ばれているが、本当の「野守の鏡」というのは、昼は人となり、夜は鬼となってこの野を守っていた鬼神の持っていた鏡のことだと答えます。さらに、「はし鷹の 野守の鏡 得てしかな 思い思わずよそながら見ん」という和歌は、この池について詠まれたのかと山伏が聞くと、老人は、昔この野で御狩のあった時、御鷹を逃がしたが、この水の姿が写ったので行方がわかったから、その歌が詠まれたのだと語ります。山伏がまことの野守の鏡を見たいものだというと、鬼神の持つ鏡を見れば、恐ろしく思うであろうから、この水鏡を見なさいと言い、老人は塚の中へ姿を消します。

<中入>

山伏は、ちょうど来合わせた土地の人から、野守の鏡の名の由来などを再び聞かされ、先の老人は、野守の鬼の化身であろうと告げられます。そこで、この奇特を喜んで塚の前で祈っていると、鬼神が鏡を持って現れ、天地四方八方を写して見せた後、大地を踏み破って奈落の底へと消えていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

東方。降三世明王もこの鏡にうつり。また南西北方を映せば。八面玲瓏と明きらかに。天を映せば。非想非非想天までくまなく。さてまた大地をかがみ見れば。まず地獄道。まずは地獄の有様をあらわす。一面八丈の浄玻璃の鏡となって。罪の軽重罪人の呵責。打つや鉄杖のかずかずことごとく見えたり。さてこそ鬼神に横道を正す。明鏡の宝なれ。すわや地獄に帰るぞとて。大地をかつぱと踏み鳴らし。大地をかつぱと。踏み破って。奈落の底にぞ。入りにける

## 能のミニ知識

### ★能の分類

**五番立て**…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

#### ○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

#### ○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといえます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

#### ○三番目物(鬘[かつら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

#### ○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

#### ○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

### ★能の楽器

**囃子方[はやしかた]**…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

**笛(能管)**:竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

**小鼓**:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

**大鼓**:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

## ★略式の演能

### 素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

### 独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

### 連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

### 仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

### 舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

### 袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

### 半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

### 独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

### 一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

### 一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

### 素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

### 番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

## ★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。  
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>